



大切なことが残っていく、 聖書は不思議な力をもった本

横田 早紀江

みなさん、こんにちは。季節が変わり自然が変化していく中で、花々がいろいろな香りを放ちながら咲き誇るようになりました。もうすぐ桜が満開になります。桜は私たち家族に、めぐみのことを思い出させてくれます。主人が桜を背に校門で写しためぐみの写真をいつも写真展などに出させていただいていますが、めぐみはあの国で桜を鑑賞することなどあるのだろうか、大好きだったお花の香りをどのくらい嗅ぐことができるのだろうか、季節がくるごとにそんなことを思っ暮らしてきました。

めぐみがいなくなった当時、悲しみと寂しさで、半狂乱になって叫んでいた私の前にボンと差し出されたのが聖書でした。ひとりの婦人が訪ねてきて、聖書を置いて行かれたのです。その姉妹は「ヨブ記というところがあるからね。読んでくださいね」とだけ言われて帰って行かれました。ヨブというのが人の名前とすら知らなくて、こんな分厚い本を、こんな悲しい時

に持ってくるのかと思って、しばらくは放ってありました。

しかし何の手掛かりもなく日が過ぎていく中で、どうやら立ち上げられるのかわからず、人間の限界ということを感じるようになっていきました。それで、「これを読みなさいね」と言われた聖書に何が書いてあるのだろう、と心が向いていったのです。私は本が好きで、いろんな本をよく読みましたが、聖書のように分厚くて、ぎちぎちに字が詰まっている本は見たことがありません。それでも「ヨブ記」を探し出して、脱力感の中で読み始めました。すると、「私は裸で母の胎から出て来た。また裸でかこに帰ろう」ということばがぼっと心に入ってきました。人はお母さんのおなかから出てきて、いろんなことがあっても、最後は元のところに魂が戻っていくんだ、何か不思議な感覚を頂いたことを覚えています。それから、ローマ書とかコリント書とか読んでいくうちに、人間は外に見えるもので、「これはすごい」「あの人は



りっぱだ」とか言うけれど、「自分はどうですか。あなたの心の中は今、大丈夫ですか」と神様はおっしゃっているということがわかってきました。それから私は、本当に一生懸命に聖書を読むようになりました。何年たってもなかなか思うようには覚えられませんが、大切なことは残っていくので不思議な力をもっている本だと思います。

「どうして、そんなにお元気にされているんですか？」と聞かれるとき、私は今のようなお話をして、「一度だけでも聖書を読んでみてください」と勧めています。「私も一度だけのつもりで読み始めて、今では何回読んでも感謝できます。そんな本は聖書だけです」と。

(2019年3月14日の定例祈り会より)